

廓丹前

長唄

全詞章

二代目杵屋勝三郎

作曲

安政四年（一八五七）

五月

作詞者不詳

俳優の昔を今に写絵や、及ばぬ筆に菱川の、寛闊^{くわんかつ}出立廓通ひ、姿彩^{すがたいろど}る丹前は、今日^{けふ}は晴^{はれ}なる
初舞台^{はつぶたい}

〔二上り〕 よしや男と名に高き、富士の白柄まばゆくも、紫匂^{むらさきにほ}ふ筑波根^{つくばね}の

腰巻^{こしまき}羽織六法に、振^ふつてふり込む、やつこのこのこの、酒^{さけ}ならねぢきり、いろ上戸^{じやうど}

恋^{こひ}の取持ちしてこいまかせろ、しよんがえ、花^{はな}にも優^{まさ}る伊達^{だて}な風俗^{ふうぞく}

抑^{そもそ}や廓の始まりは、遠^{とほ}つ元和の四ツの年、庄司何某禰宜町へ、五ツの街開^{まちひら}きてより

揚げや、揚屋の数も大門に、三千楼の色競^{いろくら}べ

先^まづ初春の飾夜具、蓬萊山と夕まぐれ、千本の桜仲^{せんぼん さくらなか}の町^{ちやう}

翳^{かぎ}す扇の目せき笠、コイヨネイと一と声^{ひと こゑ}を、ほぞんかけたる時鳥^{ほととぎす}

お供^{とも}帰りの酒機嫌、謡^{うた}ふ小唄の土手節^{どてぶし}に

かかる山谷の草深^{さんや くさぶか}けれど、君^{きみ}が住家と思^{おも}へばよしや、玉^{たま}の台^{うてな}もおろかでござる

余^よ所の見^みる目もいとほぬ我^{われ}ぢやよ、お笑^{わら}ひやるな名^なの立^たつに

姿見^{すがたみ}かへる葉柳^{はやなぎ}の、結^{むす}んで解^といた雲^{くも}の帯^{おび}

掛けし屏風^{びやうぶ}の雀形^{すずめがた}、比翼^{ひよく}枕^{まくら}の暁^{あかつき}に、鵲^{かささぎ}渡^ぎす天^{あま}の川^{がは}

星待^{ほしまち}合^あひの辻^{つじ}うら茶屋^{ちやや}に、七夕^{たなばた}さんのころび寝^ねも、きぬぎぬ早^{はや}き草^{くさ}の市^{いち}

軒端^{のきば}を照^てらす花灯籠^{はなどうろう}、その八朔^{はつさく}の白襲^{しろがさ}ね

雪^{ゆき}の素顔^{すがほ}に鉢巻^{はちまき}しやんと、月^{つき}に仁和賀^{にわか}の勢^{いきほ}ひ獅子^{じし}、やア締^しめろやれ

締^しめて寝^ねた夜^よは枕^{まくら}が邪魔^{じやま}よ、やア可愛^{かはい}可愛^{あい}の相槌^{あひづち}の音^{おと}、ヨイヨイ、ヨイヤナア、エイエイ、

エイヤナア

やれこれこれは手^てがそれたか、いとしけりやこそ、おいどをちつくりたたいた、ヨイヨイ、

ヨイヤナア、よいとな、やア締^しめろやれ

よいサよいサよいこれはのサ、そつこで締^しめろ中綱^{なかづな}

よく咲^{さき}揃^{そろ}ふ花紅葉^{はなもみぢ}、秋葉祭^{あきはまつり}の冬^{ふゆ}の来^きて、門^{かど}に松竹^{まつたけ}年の関^{せき}

おほみそか、だいがかぐら、きつね、大晦日^{おほみそか}の大神楽^{だいかぐら}、狐^{きつね}で浮^うかせ、うかれ浮^うかるる浮拍子^{うきびやうし}

実^げに全盛^{ぜんせい}は闇^{やみ}の夜^よも、吉原^{よしはら}ばかり月^{つき}と花^{はな}

柳^{やなぎ}の廓^{くるわ}寿^{ことほ}ぎて、目出度^{めでた}く揚屋^{あげや}に入り^いにける